第２６回区民車座集会意見交換内容（多摩区）

１　開催日時　平成２８年１１月２６日（土）　午後１時３０分から午後３時０７分まで
２　場　　所　多摩区役所１１階会議室
３　参加者等　参加者１０名、傍聴者１３名　　合計２３名
　　専修大学・明治大学・日本女子大学

＜開会＞
司会：皆様、お待たせしました。それでは、定刻となりましたので、ただいまから第２６回区民車座集会を始めさせていただきます。
　私は、本日の司会を務めさせていただきます多摩区役所企画課の木野田と申します。本日はよろしくお願いいたします。
　まず、参加者数につきまして、お知らせをいたします。
　本日は、多摩区内に立地する専修大学、明治大学、また日本女子大学から事前にお申し込みをいただきまして、今回１０名の方に参加をいただいております。
　なお、３大学、そして多摩区につきましては、文教都市としてふさわしい地域社会づくりを目指して、平成１７年の１２月に協定を締結しています。そして、多摩区・３大学連携協議会というものを設立いたしました。
　協議会では、大学の持つ知的資源や大学の皆さんの人材を活用させていただいて、地域社会との連携に取り組んで、区民の皆さんと一緒に地域課題の解決に向けた実践的な活動を展開しているところです。
　また、毎年秋ごろ、多摩区３大学コンサートということで、３大学の皆さんに参加をしていただいたコンサートですとか、あとは区役所のほうでインターンシップの学生さんの受け入れをさせていただいて、そのイメージだけではない、実際の公務員のお仕事について経験をしていただいているところでございます。
　今回、全員出席ということで、特にお休みの方はいらっしゃいません。
　次に、行政からの出席者につきまして、御紹介をさせていただきます。
　まず、福田紀彦川崎市長でございます。

市長：どうぞよろしくお願いします。

司会：次に、中村孝也多摩区長でございます。

多摩区長：どうぞよろしくお願いいたします。

司会：それでは、最初に福田川崎市長から一言御挨拶をお願い申し上げます。では、市長お願いいたします。

＜市長挨拶＞
市長：皆さん、今日はありがとうございます。御参加をいただきまして。
　区民車座集会ということで、私は市長に就任してから、毎月１回ペースで各区を回っているんですが、今、４巡目になります。
　今日は２６回目ということになりますが、この数回は、なぜかというか、うれしいことに、若い人たちの意見を聞く機会というのに恵まれておりまして、今日は多摩区で３大学連携ということで、昨年、それぞれの学長さんとのディスカッションはあったんですけど、もう１０年、１１年目を迎えているということで、

その学生さんたちに来ていただいて本当にありがたく思っています。
　この川崎に住んでいる方というのは、恐らく少ないというふうに聞いていますが、せっかく縁あって、この地域で学んでいる皆さんですので、何らかの形でこの川崎の土地に関わってもらえればというふうに思っています。そうした視点で、今日はいい意見交換ができればなというふうに思っておりますので、ざっくばらんな形でやりたいと思いますから、緊張せずにやりたいというふうに思っています。どうぞよろしくお願いします。

＜意見交換＞
司会：市長、ありがとうございました。それでは、早速ですけれども、意見交換に入らせていただきたいと思います。
　今回の車座集会では、３大学の皆さんから事前にいろいろな御意見をいただいております。それらの御意見を、今回、多摩区の四つの課題分野ということで、四つのテーマに分けさせていただいて、皆さんからまず発言をしていただいた後に、各テーマに沿って、皆さんと議論をさせていただきたいと思います。
　それでは、お手元にあります区民車座集会意見提案一覧というものがＡ４の両面であると思いますけれども、そちらに沿って上から説明させていただきたいと思います。
　初めに、一番御意見、御提案をいただきました、安全・安心ということで、そちらの分野のほうから発言を、学生さんのほうから、いただきたいと思っております。
　それでは、上から、まず一番目の佐々木さんに御発言をお願いいたします。

市長：大学ごとに皆さん席が分かれているんでしたっけ。そういうわけではないですか。
　専修大学の方はどなたですか。日本女子大の方は。明治の方、４人ですね。ありがとうございます。

佐々木さん：皆様、こんにちは。専修大学文学部歴史学科の佐々木龍治と申します。
　私からの提案といいますのは、自転車の運転マナーについてということで、２０１５年６月に改正道路交通法というものが施行されて、自転車に対してもすごく厳しい罰則が科されるようになって、１年と半年経つと思うんですけれど、私が感じる限りでは、マナー、姿勢といいますか、ルール自体がまだ浸透が甘いように思えて。私は登戸までよく自転車を利用して、そこから南武線で川崎区のほうに向かったりするんですけど、その道中とかで、やはり自転車のマナー、昼間でしたら右側を走ってきたりとか、あとは、雨の日であれば傘を差して、そのまま前を非常に危ないまま走っていたりとか、すごく危ない状態を何回も見てきて、このままで大丈夫なのかなというのをすごく日常的に感じていまして、そのことに関して、今はどのような感じにマナーの徹底をしているのかというのを、市長に聞いてみたいなと思いました。以上です。

司会：ありがとうございます。
　最初に、安全・安心というテーマで、５名の方に先に御意見をいただきたいと思います。
　続きまして、２番、鈴木さん、よろしくお願いします。

鈴木さん：すみません。鈴木と申します。よろしくお願いいたします。
　私は、川崎市には住んでいないんですけれども、よく向ヶ丘遊園駅や登戸駅を利用することがありまして、それで、やっぱりきれいな町とか住みやすい町という印象が川崎にはあったんですけれども、昨年ごろから来たときに、ごみのポイ捨てやたばこの吸い殻などのごみが多摩川の河川などに目立つところがありまして、ちょっときれいな町という印象ではなくなってしまいまして、その点から過ごしやすい町だと思っていたのに残念だと思いました。

それで、さらに過ごしやすい町になってほしいなと思っているので、ごみのポイ捨てや過ごしやすい町への改善をしていただきたいなと思っております。ありがとうございます。

司会：ありがとうございます。
続きまして、田中さん、お願いします。

田中さん：田中美夕と申します。よろしくお願いいたします。
私は、ここ最近地震が多発しているということをとても気にかけていて、大学に通っているとき、自宅にいるときの避難場所については、各自確認しているので大丈夫なのですが、例えば、自分が大学に通っている途中、または勉強している途中に震災に遭ったとき、どのような対応を市がとるのか、また、私たちがどのようなことができるのかという点について気になりました。
例えば、調べてみたんですけれども、マップ上では、すぐ隣にある学校が避難場所として指定されていて、給水補給所にもなっているにもかかわらず、隣の私の大学は、とても広いキャンパスで、また、いろんな方々が利用できるのに、特に利用がなされないのかなというところが気がかりでした。
例えば、グラウンドの開放は、ここ最近行われていると聞いているのですが、それを利用することはできないのかですとか、大学内のキャンパスも給水補給所とかと連携して何か活動ができないのかなということを意見として持ちました。
以上です。

司会：ありがとうございます。
続きまして、飯塚さん、お願いします。

飯塚さん：飯塚奈夏と申します。本日はよろしくお願いします。
私が一番関心を持っているのが、生田駅周辺の交通事情についてです。
まず、踏切の開閉のために、朝や休日に大きな渋滞が起こっていることに不安を覚えています。踏切の中に無理やり入って横断しようとする人が多く、事故になっていることもあります。
また、多摩区の小・中学校の周りでは、路駐する車が多く、夜間には特にドライバーさんが車の中で寝ていることがとても多いです。
また、昼間では、子供の登下校の場にもなっておりますし、お母さんが子供を自転車の前後に乗せて走っている姿もあります。そのところに路駐している車がありますと、飛び出しで交通事故の原因となりますので、このような市民の交通意識をもう少し高めていただければ、私たちが安心・安全して暮らせる町となると思います。
以上です。

司会：ありがとうございます。
続きまして、若色さん、お願いします。

若色さん：若色楓と申します。よろしくお願いします。
私が気になったのは、よみうりランド前駅周辺のベンチの設置に関してです。
よみうりランド前から日本女子大学まで歩いて通っているのですけれども、その途中にバス停がありまして、そこが結構学生が通る時間帯、特に４時ごろとかに、地元の方たちも並んでいまして、そこがすごく混雑しているというのが気になりました。

そのときに、お年寄りの方たちが、バスの待ち時間中に足が疲れてしまったのか、結構座り込んでしまっている姿を見るのが多くて、よみうりランドまで行くバスにはベンチが設置してあるんですけれども、そういった地元の方々が使うバス停には余りベンチがないなというふうに感じましたので、このテーマを出しました。

以上です。ありがとうございます。

司会：ありがとうございました。

以上が、安全・安心ということで、５名の方に御意見をいただいております。

ここからは、今回、５名以外の方も、１０名いらっしゃいますので、皆さんを含めて、このテーマで少し意見交換、ディスカッションをしていただけたらと思います。率直に感じていること、考えていることをお話しいただいてよろしいかと思いますので、よろしくお願いします。

また、お手元に帽子かぶっている感じで水がございますので、紙コップを使ってもどちらでもいいですけれども、緊張すると舌が渇きますので、自由に飲んでいただけたらと思います。

では、このテーマにつきまして、よろしくお願いいたします。

市長：ありがとうございます。

５名の皆さんから、まず、安全・安心についてというカテゴリーで御意見いただきまして、ありがとうございました。

大体、今、皆さんのお手元に提案の一覧表というのを配られていると思うんですけれども、何となく地理的な感覚も、皆さん大体分かりますよね。登戸駅には、ポイ捨ての話がありましたけど、大体感覚で分かりますよね。あと、よみうりランドのあの坂の今、お話ですよね。何となく分かりますか。そういう感覚の中で、みんなで意見を出し合っていきたいというふうに思いますけれども。

まず最初に、個別の案件については、少しお答えをさせていただきたいと思います。

若色さんからお話があった、よみうりランドの周辺のベンチということで、とても優しい視点だなと思います。見ていて、お年寄りが座り込んじゃっているというふうなのを見て、本当にベンチがあったらいいなというふうに思っていただいたというのはすごく優しい視点で、こういう視点が、まちづくり、どういうふうに道路をつくっていこうかとかという感覚の最初のつくる段階で、そういう発想ってとても大事だと思うので、とてもありがたい意見だと思います。

実は、やっぱり川崎というのは、政令指定都市の中で一番小さい、土地的に一番小さいところでもありますし、もう住宅密集地で、これだけ人口密度の高いエリアですから、当然道路も、特によみうりランドは世田谷通りも含めて、物すごく狭いですよね。もともとあそこは道路というよりも、馬車が、馬が走っていたぐらいの道路だったので、もともと自動車道路という感覚は余りなかった時代からある道路なんですね。

そこから分岐していく、よみうりランドに上がっていく、そういう坂のところだと思うんですけども、あのあたりも非常に狭い。特に歩道も、両側広ければいいんだけども、片側狭いというところが全市的にどこでもいっぱいあります。バス停がそういう細い、歩道が余り確保されていないところもバス停になっているというところが、市内にもあるという、ほとんどと言っていいぐらい、そういうところです。

実は、ベンチをつくってくださいという要望は、全市的に物すごく多いんですね。ただ、そこにはやっぱり制約があって、歩道の幅員が２メートル以上ないと、ベンチを置くと、要は通行の妨げになるということで、普通に通れなくなってしまうということがあって、一応の規則というふうなのが決まっています。ですから、置けるところにはなるべく置きましょうねというふうなことをしているんですけども、やはり狭くて２メートルの幅員がとれないというところには、ベンチは置けないということになっているので、何らかの工夫はしたいと思うんだけども、そういうルールがあるということを、まず知っていただきたいなというふ

うに思います。

本当になるべくそういった待ち時間を少なくするために何ができるかといったら、それはやっぱりバス事業者も定時に来てくれる、遅れもせず、早過ぎもせずということが待ち時間を少なくするということになりますので、市営バスも含めてなんですけれども、バス事業者の人たちにはなるべく定期運行してもらう、余り待たないようにするために。

この前の高津区の高校、市立の高津高校でこの車座集会をやったときに、こういう提案がありましたね。何だったかな、今、出てきていたのに忘れてしまって、急に。

そうそう、大雪のときに、去年、大雪がありましたよね。大雪のときにバスが走らなかったときに、待っていた人がいらっしゃった。御質問じゃなくて僕が言ったんですね。大雪のときにバスが来なくて、来ないことをインターネットで調べていた人たちは知っていたんだけども、だけど、お年寄りはそれを知らずにずっと待っていたと。こういうことってないようにしてほしいというふうな話もあって、なるべくそういう表示板をつくりましょうとかってやっているんですが、もう一つは、こういったハードの整備だけじゃなくて、自分が気がついたら、実は今日来ませんよと、もう何時ぐらいまでバスは来ませんから、一回おうちに戻ったほうがいいですよというふうに、機器だけだとか整備だけに捉われない、もう少しお互いの思いやりというふうなのがそこをカバーする。そんな取り組みも僕は必要だと思うんですよね。ですから、そういう意識が大事。

若色さんに言っていただいた、何かそういう優しい気持ちね。お年寄りが座っているって、これは良くないよねというそういう気持ちが、とても次の何かを考えるヒントになるというふうなことなので、いろんな制限はあったとしても、その制限のほかにある方法は何かないかということを、やっぱりみんなで考えていく必要があるし、僕たちもそういう視点で頑張っていきたいというふうに思っています。

それから、生田駅の踏切、飯塚さんの話は、これはどこもなかなか、これも難しいテーマで。踏切の、開かずの踏切って１時間に４０分以上閉まっていると開かずの踏切というふうに言うという定義がちゃんとあるんですよ。

生田駅周辺の踏切も、あれも開かずの踏切というふうに指定されていて、国のほうで、何らかの改善をしなくちゃいけないというふうになっているのですが、これまた非常に難しい。小田急さんとも計画がいろいろあるんですけども、まずは登戸駅までの整備というふうなのをちゃんとやりましょうと。都心からですね、登戸駅までのをやりましょうというふうな話ですけれども、それ以降の話というのは、まだそこの整理というのはできていないんです。ですから、立体化するとか、そういった話というのはなかなか難しい。まだ、やったとして相当先になるんじゃないかなというふうに思います。

ただ、踏切も幾つか種類があって、賢い踏切というのがあります、変な名前だけど。実は、電車が入ってくるずっと前から閉まっちゃっているとか、通過してもなかなか開かないとかっていうのって経験ありますでしょう。それで、賢い踏切というのは、もうちょっと本当に賢くて、余り手前からは閉まらないとか、あるいは、電車が行った後はすぐ開くとかという、そういう踏切になっているところというのは、若干ですけれども解消ができているところもあります。

生田駅のところは、恐らく賢い踏切になっていると思います。もう一度、私、確認しますけれども、なっているんじゃないかなと思うので、そうすると、できることっていうのはすごく少なくて、今のところだと現状では非常に難しいなということです。

それだけじゃなく、生田駅、よみうりランドのところも、駅に入るところが非常に込んでいるというのを、僕もよく、実家が百合丘なものだからよく知っているんですけど、あそこもやっぱり信号機と踏切の連動が良くないとか、何かいろんな複合的な要因もあるので、そういったこともチェックしながらやっていきたいなというふうに。できることはしっかりやっていきたいというふうに思います。ありがとうございます。

それから、鈴木さんのポイ捨ての話。すごく本当に残念なあれですけど、現実そうなっているということ

ですよね。鈴木さんは専修大学。

鈴木さん：はい。

市長：専修大学は美化活動なんかにも結構協力していただいているということで、本当にありがとうございました。

僕は、毎年６月に、多摩川美化活動というのがあって。みんな知っている？知っている人、どんな美化活動か。（挙手）

一人か。なかなかきついな。

毎年６月に多摩川美化活動というごみ拾いをやっていて、多摩川に面している川崎市内５区の人たちがみんな集まって、そこで一斉にごみ拾いをやるんですよ。これは実は４０年ぐらい続いているんじゃないかと思うんですけど、３０年ぐらいですかね、やっているんですけど、僕は当初のころから参加していて、昔は多摩川のごみを拾うと、もう本当にごみだらけで、トラック何杯分もごみが出てきたんですよ。毎年毎年なかなかごみだらけだなと思っていたんですけど、今や多摩川の河川敷のあたり、ごみ拾い美化活動をやると、ほとんど宝探し状態になります。「ごみとったどー」みたいな感じぐらい、本当にごみがなかなかないぐらいきれいになってきたというのは、これは本当に市民の皆さんの意識の高さで、ごみがないことによって捨てちゃいけないんだという意識が変わってきた。だから、これは長年にわたって多摩川を自分たちの川だよね、きれいにしていこうねというふうなのが取り組んできた結果、そうなってきたんだと思います。

ですから、今、本当に登戸だとか多摩川の一部のところで、そういうポイ捨てがあるというふうなのを聞いて、すごく残念な思いをしたんだけども、ぜひ、そういう、こういったマナーみたいな話というふうなのは、喫煙マナーにしても、ポイ捨てにしても、ごみを捨てるにしても、こういうのって、例えばポイ捨てみたいなのは重点地区では罰金を取っていたりもするんですけど、制度もあるんだけど、それでは正直解決しないですよね。もともとはやっぱり意識の問題、マナーの問題というのを、どれだけ僕たちの市民の中で定着させるかということが、何よりもきれいにしていくことの、大事だと思うんですね。

海外に行くと、例えば、今、川崎市の職員がインドネシアに廃棄物のことで指導に行っていたりするんですね。インドネシアって、実は分別もようやく始まったとか、もともとごみを焼却するという文化がないんです。ごみはそのまま捨てる。要するに、そのまま埋めちゃうというところなんですね。だから、こういうふうに分別してやっていきましょうという、いわゆる国民教育みたいなことについて、市もいろいろ助言をしたりしているんですけども。そういったまだまだ徹底できていない状況って川崎市内にもあることですから、さらにこういった機運を盛り上げていきたいなと。時間がかかるかもしれないけど、僕たちがやってきたという自負というか、あるので、これからもさらに皆さんのような若い人たちが、どんどん変わっていくということによって全体的に変わっていくと思います。でも、市でできることも一緒に啓発、頑張っていきたいと思います。

それと、あと、ちょっと大きな問題。自転車マナーと、それから震災のことについては、少し皆さんの意見もお聞きしながらお話ししたいと思うのですが。

まずは、自転車マナーについてですけれども、そうですね、残念ながら多摩区は、自転車事故が多発地帯ということで、県の中で何カ所だったか、１０カ所ぐらいだったんですかね、１０カ所ぐらい（※注１）あるうちの一つに選定されるぐらい、やっぱり自転車事故が多いという重点地区になっていまして、非常に不名誉なことだと思っています。（※注１）正しくは、県下２１カ所です。

佐々木さんに言っていただいたように、道交法が変わったことというふうなのは、みんな知っている人は知っているんだけども、実際に走ってみて、これはやっぱり危ないとか、何となく感覚でやっちゃっているんじゃないかという思いもあるんですね。あのあたりが、やっぱりなかなか浸透していないんじゃないかと

思うんですけど、皆さん、どうですか。新しい道交法のことって知っていますか。
　あるいは、自転車に乗っている人。（挙手）
　二人。みんな自転車に乗らない。そうか。
　どうですか、河崎さん。

河崎さん：専修大学の河崎です。
　僕は川崎市では自転車に乗らなくて、実家のほうで自転車に乗らせていただいているんです。そうですね、余り右とか左とか気にしたことはないです。やっぱり何となく左を走ろうかなみたいな感じで、時間がなければ右を走ることもなきにしもあらずで。

市長：自転車で危ない思いをしたことがある人はいますか。（挙手）
　結構、たいがい危ない思いをしている。危ない思いをした体験談なんかちょっと、近藤さんどうですか。どんなときに危なかった。

近藤さん：夜になって暗いときに、走っているときに、何かポールが立っている道があって、その自転車を区切るためのポールだと思うんですけれども、そこを見逃しちゃって、直前に、ぶつかりそうになったとか、人じゃなくて良かったなと思ったんですけれども、自分だけだったので。何か、人だったら、自転車が真っ黒とか、服装が真っ黒とかだと、危ないなと感じました。

市長：そのぶつかりそうになったものは何なんだろう。ポールみたいなもの。

近藤さん：ポールです。

市長：なるほど。それに、いわゆるキラキラ光るものがついていなかったとか、そういうことですかね。

近藤さん：そうですね。真っ暗だったので。

市長：なるほど。
　大迫さんは、どんな思いをしましたか。

大迫さん：専修大学の大迫です。
　信号のない十字路を走っていたんですけど、スマートフォンをいじりながら歩いてきた方がいらっしゃって、ちょっとぶつかりそうになったというのが危ないと思いました。

市長：黒沼さんは、どうですか。

黒沼さん：明治大学の黒沼です。
　私は、やっぱり夜で、あと雨が強いときってやっぱり傘差し運転をしている方で、歩行者とやはりすれ違うとき、私が歩行者だったんですけど、相手の方がやはり傘を差していて、ビニール傘とかでも白いやつとかだと前が見えないというのがあって、そのまま進んでくると、お互い傘を差しているので、どうしても傘がぶつかって、一瞬危ない思いをしたことがあります。

市長：こういうのって物すごく基本的なマナーですよね。スマートフォンをやりながらとか、傘をこうやって差して乗ったら危ないということは基本的なマナーだと思うんだけども、これ、実は多摩区でも、いろんな講習会をやって、区長、いろんな取り組みをやっていると思うんですけど、区長のほうから少し。

多摩区長：多摩区は、実は自転車事故の多い区なんですね。それで、そういう自転車のマナーを守りましょうということで、さまざまな交通安全対策、あるいは交通安全教室をやっています。

例えば、交通安全教室ですと、小学校、中学校、高校生に対しての交通安全教室。あるいは、もっともっと小さい、幼稚園、保育園のお子さんに対しての交通安全教室とか、あるいは町会を通して、高齢者の方への交通安全教室。実は、これは年に１００回ぐらいやっています。その中で、自転車の交通安全対策も年に３０回ぐらいやっています。

それ以外に、中学生、高校生には、スケアードストレイト方式という言葉を聞いたことありますか。これは実際にスタントマンが事故の現場を再現する。見せて、そういう事故は危ないということを実感してもらうという、そういう教室を実は中学校、高校で多摩区の中で年３回やっています。

そのようなことで、交通安全の啓発をしているんですけども、なかなか今、皆さんがお話しされたように、本当にスマホをいじりながらのながら運転とか、あるいは無灯火の、明かりをつけない運転とか、そういうものがなかなか減らなくて、これは地道に交通安全キャンペーンなんかもやっていますので、そういうのを地道にやっていくしかないのかなというふうには思っています。

市長：実は、子供、生徒さんには結構やっているんですけど、実際危ない思いした人って、対象者、スマホをやっていた人はどんな年齢層だったか。

大迫さん：大迫です。

大人の方、男性の、おじさんぐらいの方でした。

市長：黒沼さんの、危ない自転車運転していた人たちって、どんな。

黒沼さん：そうですね。やはり若い方でしたね。

市長：若い人。年齢的に言うと。

黒沼さん：そうですね。２０代から３０代ぐらいの方でした。

市長：なるほど。

佐々木さんなんかは提案者だけど、マナー悪いのはどのあたりですかね。年齢層というか、どういう人たちが危ないかな。

佐々木さん：やはり改正前に自転車を利用するようになった方、僕たちの世代でありますとか、それより上の３０から５０代ぐらいの方が、やはり僕の体験中の中にも多くて、やってくださっている生徒さんというのはすごく少なくて、若い世代は全然危ない運転しているという姿を見かけないんですけど、という感じですね。

市長：なるほど。

田中さんとか飯塚さんもさっき手を挙げていて、危ないと。どうですか、今、佐々木さんの言われたように、意外と道路交通法の改正前から自転車を運転している人たち、そういう人たちのほうが実は危ないんじゃないかという思いはありますか。

田中さん：私が車を運転していたときなんですけれども、先ほど言われた方がいらっしゃったんですけど、傘を差して運転している、自転車に乗っている方がいらっしゃって、そのとき、その方はたしか男性で、年齢も３０代かな、４０代かなというような顔つきだったんですけれども、結構道路側にはみ出してきていたりとか、歩道と行ったり来たりしていて、歩道の方にとっても危ないし、私が運転しているときも、よけていいのかどうしていいのかと迷っている感じでした。

市長：なるほど。
飯塚さんは。

飯塚さん：私が危ないと体験したのは、自分が車の助手席に乗っているときなんですけれども、かなり高齢の方が自転車を運転しているときに、交通ルールというよりも、御自身の体調であったりとか、御年齢であったりもすると思うんですけれども、大きく道を出てしまったりですとか、どちらに曲がるのかこちらにも分からないような運転の技術であったりだとかが問題だと思いました。

市長：なるほど。
何となくこう話しているだけでも、どこにターゲットをもう少し向けていかなくちゃいけないのかというのが見えてきたような気がするのですが、佐々木さんのおっしゃるように、道路交通法がちゃんと徹底されていないんじゃないかというのが、認知がされていないんじゃないかというのが最初の御提案で、区長が言ったように、児童・生徒に対しては１００回ぐらいやっているというぐらい、かなり頻度は多く、対象者も多くやっているんだけれども、実際にそういった講習だとかにかぶらない、ひっかからないというか、そういったところへの啓発、周知徹底というのが必要だということに、何となく今の議論ではなっているような気がするんですが、皆さんいかがですか。そんな感じする。
どうですか、河崎さん。自転車乗っている側とすれば。

河崎さん：もう一度いいですか。どのようなことが。

市長：いわゆる、子供たちを教育することは重要なんだけども、今乗っていて、道路交通法以前からずっと自転車に乗っている人たちですね。そういった少し年齢が高目の層とかに、周知・啓発みたいなのをやっていくべきなんじゃないかというのが、今の議論で見えてきたような気がするんだけども、そのことについて河崎さんはどう思いますか。

河崎さん：そうですね。私の父と母も自転車に乗るんですけど、余り一緒に自転車に乗るということはないんですけど、危ない運転をしているなというところは、話を聞く中ではあったりするので、やっぱり父と母の年齢になると、自転車の講習というのですか、そういうのを受ける機会というのはないと思うんですよ。なので、そういう人たちに絞ってやるというのは、すごくいいと思います。

市長：非常にいい議論ができてきたと思うんですけども、これまでも区長が言ったように対策はやってきたけども、もう少し年齢層のところを、ターゲットを上のほうにも当てるような、そういった周知・啓発活動

が必要になってくるということだというふうに、今の議論の中では見えてきたと思います。ぜひ、そういった施策を少し考えてみたいと思います。

いろんな取り組みをやっていると思いますが、もう少しターゲットはどうなんだろうということをもう一回整理して、政策につなげていきたいなというふうに思っています。ありがとうございます。

何かこれについて、言っておきたいという方、いらっしゃいますか。大丈夫ですか。ありがとうございます。

時間的に大丈夫ですか。

司会：もうそろそろです。

市長：メモが入りました。小田急線の踏切ですけれども、賢い踏切になっているそうです。ということは、なかなかこれ以上の時間短縮というのは、厳しいということです。踏切自体ということではですね。

ですから、先ほど言ったように、信号と、極端な意味ではちょっと違うかもしれませんけども、そういったほかの工夫が必要になってくるということです。

もう一つの震災の話で、田中さんから御提案をいただきました。

そうですね。本当に災害は忘れないうちにやってくるというのが最近のあれで、東日本もそうですけども、この前の熊本、福島、いつ起こるか分からないので、僕たちも非常に危機感を持っているんです。

市の職員の体制とすれば、例えば、震度５強になった段階で、どんな通知もせず自動参集すると、決められたところに自動参集するということになっています。

本当に地震が、例えば地震のケースですけれども、どの時間帯に、どういう状況で、どんな季節にというふうなのによって、全然対策というか対応というのは異なってくると思います。

先ほど、避難所の話が田中さんのほうからお話がありましたけれども、基本的には、例えば皆さんが住んでいる地域の人たちが、全員指定された避難所のほうに行ったら、瞬間的に避難所はパンクします。ということで、いわゆる倒壊の危険性が非常に高まっているとか、あるいは、いわゆる、居れないという人たちが避難所に行ってください。基本的には、まず避難所に行くという方針にはなっていません。本当に居られないとか、そこでとどまることができない方というふうなのが、避難所にまず行っていただくというふうな形になっていますが、そういった形での備蓄計画、例えば公的な備蓄ですね、ということにもなっています。

例えば、今ですと１３万５，０００食（※注２）というふうなのを川崎市全体で備蓄をしています。

（※注２）正しくは、約１３万８，０００食です。

それは、川崎市が出している被害想定というのがあるんですが、その被害想定で、要するに先ほど言ったように、家にはいられない。ましてや、食べ物を自分で煮たり焼いたりとか、煮たり焼いたりというのも変ですけども、そういうことが基本的にできないというふうなことを想定して、その数を用意しているということになっていますけれども、とにかく災害のときになったら、まず自分のことを、身を守ってもらう。自分の命をまず自分で守るということをしない限り、公的な援助というふうなのはなかなか届かない。ですから、備蓄にしても、３日間分はまず自分たちで用意してくださいということをお願いしています。

皆さんの中で備蓄をしている人、家に備蓄があるよ、住んでいるところに水を用意しているという人、ちょっと手を挙げてください。（挙手）

６名ですね。１０名中６名ということで６０％。大体、市平均よりもちょっと増えるぐらいですかね。アンケートをとると、５４～５５％じゃなかったかなと思いますね。備蓄をちゃんとしているというふうな。ちょっとまた下がってきているんじゃないかと思いますけど。震災直後、東日本大震災みたいなのがぽっとあると、みんな備蓄するんですけど、しばらくすると下がってきちゃう。やっぱり意識を常に持っているかどうかですよね。

もう一回備蓄している人、手を挙げて。（挙手）
大迫さん、なぜ備蓄をしていなかったんでしょうか。

大迫さん：大迫です。
昔はしてたんですけど、賞味期限が切れてきたりとかして、そのまま買い足さないということになってしまって、現在はないという形になっています。

市長：これは物すごい備蓄品あるあるみたいな話で、これは物すごいあるケースです。たいがいそうなっちゃっている方というのは、大迫さん、物すごくいい事例を出していただいたと思いますけども、誰かしていない方いましたっけ。
若色さん、どうしてしていませんか。

若色さん：若色です。
以前はしていた記憶はあったんですけども、道具すら、ちょっと今、家のどこにあるのか分からないような感じになってしまいまして。多分賞味期限が切れていると思いますし。余り家族自体そういう話が出てこなくなってしまって、自分から積極的に備蓄するというのは忘れているというか。

市長：それも備蓄の話ではあるあるですね。２大あるあるみたいな話を二人にしていただきましたけども、大体なかなかこの震災、以前はしていたと思う、だけども、何となく、あれっと思っていたうちに、どこだったかなというふうな話と、意識していたけども、備蓄の賞味期限が切れちゃったというふうな話というふうなのは、よくある話です。ぜひ、機会は何度でもあったほうがいいので、今日を機会にぜひ備蓄をすると。一人１日３リッター、３日分ですから９リッターです。結構な量ですので、大変だと思いますけど、ぜひそれはしてもらいたいなと。
それで、どこにいるか分からないということなので、例えば田中さんが学校にいた、自宅ではなく学校にいたときというふうなのは、実は田中さん初めここにいらっしゃる若い学生の皆さんは、大変な人的な戦力です。
阪神淡路大震災のときも、建物が倒壊したといったときに、誰が助け出したかといったら、家族、そして近所の人ということで、公的に助け出された方というのはほぼいらっしゃいません。本当に数％です。二桁いっていません。というぐらい、近くにいる人が頼りになるわけですね。
実は、この川崎のようなところは、働きに出ている人たち、本当に私とかという、こういう働いている世代というのは、自宅の近くにいないことが多いんですね。例えば、東京に働きに行っている人、横浜に働きに行っている人というのはたくさんいます。そうすると、もう本当に救助ができる力を持っている人、動ける人というふうなのは、実はそんなに多くないんじゃないかというのが、この都市部特有の問題です。その中で、中学生とか、中学生以上、中・高・大学生の力というのは、物すごく頼りにしたいところなんです。
高津区の実は消防団の皆さんが、ジュニア消防団（ジュニア・ハイ・スクール消防隊）というか消防リーダーという形で、中学生の皆さんが消防団と一緒になって消防活動のお手伝いという、消防というよりも、何かあったときに自分たちも活動できますよという、そういうチームを組んでくれているところもあります。
ぜひ、この３大学の皆さんに、これからちょっとそれぞれの学長さんのところにお願いに行かなくちゃいけないと思うんですが、ぜひ、こちらにいた場合、ぜひ、自然にやっていただけるんだと思うんですけども、でも、こういう意識で、それぞれの大学の近くの人たちに手助けしてくださいというふうな形で、御協力いただきたいなと思っています。
一つだけちょっとお願いが、消防団って知っていますか。消防団の組織。知っている人。消防団。（挙手）

でも、意外と知っている。加入はしていないですよね。している……、していないですね。

実は、消防団の人たちは、自分で仕事を持ちながら、地域にいながら、消防団活動をしていただいています。なかなか若手のなり手が非常に少なくなってきているということにすごく危機感を持っています、僕たちも。

ぜひ、これは国を挙げて、今、取り組み始めるところなんですけども、学生の皆さんに消防団に入っていただけませんかというお願いをさせてもらっています。それについて、消防団で活動していますという証明書を川崎市から発行するということになりますと、すごくいやらしく聞こえるかもしれませんけれども、就職のときにこれが非常に有効だというふうな、民間企業もそのことを理解して、国を挙げてそれをやっていくと。ですから、地域に貢献していただいている人たちというふうなのが、こういう学生さんが地域で活動していますよということの証明書を発行する。そのことが、企業にとっても、「そういう地域貢献をしているすばらしい人材ならば、ぜひ就職に採用したい」というふうな、そういう意識をみんなでつくり上げていきましょうということを今から始めます。

ぜひ、皆さんに、消防団はそれぞれの地域にありますから、ぜひ参加していただきたいなというふうに思っています。

ですから、田中さんの直接的な答えではないかもしれませんが、自宅にいるときは、ここの川崎じゃないわけです。それぞれの地域のところでやっていただきたいと思いますし、川崎で被災した場合というのは、大変皆さんは頼りにさせていただきたい存在であるんで、ぜひ何となく防災の意識があるか。今、この時点で被災したらどうしようかということを、少し感覚の中で持っていただくと、次のいざというときの動きにみんなそれぞれ変わってくると思いますので、ぜひ、そういう意識を持っていただきたいなというふうに、これはお願いです。

防災について、何か皆さんから御意見はありますか。何か田中さんから補足的な話はありますでしょうか。

田中さん：そうですね。意識が大事というふうに、今、言っていただいて、ほかのことについても、意識が大事だなということを、今、痛感しています。

そうしたときに、例えば、これから助けていただく、力になってほしいんだということを言われたときに、じゃあ、いざ何をしたらいいのかということについては、まだこれから一緒に検討していったりとか、連携をしていくという段階ということですか。

市長：まず、例えば、避難所運営会議というふうな、各地区で、各町内会でやっていただいています。ですから、例えば小学校。田中さんの大学の隣の小学校で避難所が開設される。その避難所運営会議というのは、自治会・町内会を中心に、それが協議会としてできています。その訓練というのは、年に何回かそれぞれやっていただいていますので、そういうところにぜひ参加していただけるとありがたいです。

避難所運営会議の自治会・町内会の皆さんが何を言っているかというと、ぜひ、地域の大学生に参加してほしいということをすごく望んでいるんですね。若い人がいない、若い人にぜひ参加してほしいと言われているんです。ですから、せっかくですから、ぜひ、それぞれの大学の、あるいは近くにお住まいのところに、避難所運営会議はどうなっているのかということを調べてもらって、ちょっと顔を出してみる、見てみる、体験してみるということで、その中で自分はどんな役割があるんだろうかということを、ぜひ探してみていただけないでしょうか。必ず皆さんが頼りにされているということが分かると思います。近くにいたらこうしてほしい、こういうことをやっていただけないかということを、必ず発見できると思いますので、よろしくお願いします。

田中さん：ありがとうございました。自分でもっと調べてみて、地域の活動に参加していければいいなと感

じました。ありがとうございます。

市長：では、第一カテゴリーについてはよろしいですかね。

司会：それでは、続きまして、次の分野に進みたいと思います。
　次は、地域連携ということで括らせていただいております。一覧の裏面ですね。６番、７番になりますけれども。
　それでは、最初に酒井さん、発言をお願いいたします。

酒井さん：明治大学建築学科に在学しております酒井と申します。
　私は、この多摩区に三つの大学があることに着目して、地域と大学の関わりについてちょっと意見を述べさせていただきたいと思います。
　私が感じているのは、大学生と地域の方々の関わりというのが、ちょっと少ないんじゃないかなということを感じました。
　先ほど専修大学さんが美化活動の参加をしているというのを初めて聞いたんですけど、そういったイベントとか、多摩区の区民祭だったりとかというのを、大学生と一緒に協力しながら運営したり、企画したりということをすることで、地域の人にも、大学生たちに悪いイメージを持っちゃっているようなところが多少あると思っているので、そういうところを改善したりだとか、大学生が地域の一員であるということを自覚できるんじゃないかなと思いまして、また、その地域の活性化にも、そういうイベントを通してつながるんじゃないかなと思って、地域と大学生がイベントを通してつながる機会をもっと増やしたほうがいいんじゃないかなと思いました。
　以上です。

市長：ありがとうございます。

司会：ありがとうございます。
　続きまして、黒沼さん、お願いします。

黒沼さん：改めまして、明治大学の黒沼と申します。
　私が提案するのは、大学周辺の活性化についてということで、明治大学なんですが、生田キャンパスにいらっしゃった方は分かると思うんですけども、坂の上にあるということで、駅周辺とは結構離れているということで、食事事情についてなんですけれども、大学内にはもちろん食堂と、またコンビニがあるんですけれども、その周辺に食事処というところが余りなく、大学に入って４年間、または院に進む方は６年間、毎日あそこに通うことになるんですけども、ちょっと食堂とコンビニだけで毎日過ごしていると、どうしても飽きてきてしまうという。せっかくでしたら、坂の上のほうにも、やはり住宅街にもなっていますし、スーパーとかもありますし、一般の方々もあの辺をよく散歩していたりするので、上のほうで何かお店とかがあって、活性化というか、町というか、そういう商店街であったり、そういうお店という立ち寄れる場所などがあったらいいんじゃないかなと思っています。以上になります。

司会：ありがとうございます。
　それでは、こちらの分野、地域連携ということで、しばらくの間、意見交換、ディスカッションしていただきたいと思います。よろしくお願いします。

市長：酒井さん、黒沼さん、ありがとうございました。
　酒井さんのコメントの中でおもしろかったのが、地域の方が大学生に対して悪いイメージを持っているんじゃないかという懸念の声を言われていましたけど、何かそんなふうに感じますか。

酒井さん：私が直接そういうことを言われたりされたりというのはないんですけど、大学生から見ても、例えば向ヶ丘遊園駅の周辺って、結構飲み屋さんとかラーメン屋さんが多くて、学生がよく集まる場所なんですけど、夜とか結構うるさいんじゃないかなとか、ひとり暮らしの人も多く、近隣の方に迷惑をかけているんじゃないかというのは、憶測なんですけど、そういうのがあるんじゃないかと思って、はい。

市長：なるほど。
　ちょっとこれはおもしろいから、もう一回手を挙げてもらいたいんですけど、何となく学生は悪い、地域から余りいいイメージじゃないんじゃないかと思っている方っていますか。ほかに。（挙手）
　ええっ、１０名中８名。これはもう、地域の人が聞いたらびっくりするほど、ひっくり返って驚かれると思うんですけど、僕は全く逆だと思います。この誤解は早く、まず皆さん解いていただいて、地域の中に入っていただくことが大事だと思います。
　これはいろんなことが言えるんですけども、お互いを知らないことが何か違った考え方を招く、コミュニケーション不足が全ての悪いことの始まりみたいなことになりますもので、実は麻生区で区民車座集会をやったときも、地域の大学生に来ていただいてディスカッションしました。
　そのときは、麻生区の自治会・町内会の役員の人たちの発表を聞いていただいたんです。それで、大学生の地域での取り組みをやっているのを発表していただいたときに、大学生がこういうことをやっているのを知っていましたかと自治会・町内会のおじさん、おばさんに聞いたら、役員の皆さんに聞いたら、全く知らなかったと。こういうことをやっていることすら全然知らなかったということなんですね。
　逆に、自治会・町内会の人たちが、こういう取り組みを地域でやっていることを学生さんたちは知っていますかと聞いたら、誰も知らなかったというような、そういう話なんですよ。
　同じ地域に住んでいて、住んでいるというか活動したり学んだりというところなのに、お互いのことを知らないというのは、こんなに不幸なことはないよねという話になったんですよ。ですから、そのときに自治会・町内会の役員の人が提案されたのが、麻生区の自治会・町内会だよりみたいなものがあるので、あなたたちのイベント、活動事を、私たちの機関紙みたいなものに載せてあげるというふうな形で、お互いの情報交換をしっかりやっていきましょうと。それぞれのイベントに顔を出し合いましょうというふうな話になったんです。
　これは本当に大事で、いかに１０人中８人が何となく悪いイメージを持っていられるんじゃないかっていうふうに答えて、これは相当ショックで、僕も今。そんなことは全くありません。むしろ、これだけコミュニケーション不足になっていたのかということに僕は衝撃を受けていて、地域の人たちは皆さんの参加をとても待っています。
　待っているって、どっちかが待っているということではなくて、お互いにやっぱり歩み寄ると言ったら変ですけど、関わり合うということが大事だなというふうに思いますね。ですから、そこのいいきっかけを、酒井さんが、今、言っていただいたように、お祭りだとかイベントだとかというふうなのを、地域の人たちを大学のイベントに招く。多摩区のイベントだとかに積極的に大学生が参加する。自治会・町内会のところにも顔を出す。結構おもしろいことをやっていますよ。どんと焼きをやったりとか、本当に地域のお祭りというのも、本当に子供たちを巻き込んでとかやっているので、そういうところに大学生がいたら本当に助かるなと思っている人たちはたくさんいるので、そういうところにぜひ入っていただきたいなと思います。

そういったコミュニケーションは、先ほどの黒沼さんの地域活性化にもつながってくる。どんな町、学生にとって暮らしやすい町というのはこういうことなんですということを、いろんな商店街の皆さんとか、あるいは地域の、繰り返しになるけど自治会・町内会の人たちに伝えていくということが、まず、第一歩として大事かなというふうに思います。

商店街の人たちも、学生さんたちってどういうものが食べたいんだろうとか、どういうものが好みなんだろうというのは、実は、なかなか意見を聞き取れなくて困っているのもあると思いますよ。僕が今、驚いたように。というようなことをやってもらえるとありがたいなと思いますけど、皆さん、何かこういう、意見ないですかね。

若色さん、どうですか。

若色さん：若色です。

私、先ほど、悪いイメージを持っているんじゃないかというのに手を挙げたんですけども、私のほうの大学は高校も入っていますので、結構きゃあきゃあ騒ぎながら帰るというのを多く見かけるというイメージがあったので、それはうるさいのかなという、それで先ほど手を挙げたんですけど、意外と地元の方々が、もっと関わり合いたいというのは余り、あと、そういう先ほどのお話も、イベントがあったというのも、大学側では余り告知されていないというか、そういうのを知る機会がなかったので。そういうのをもっとお互い、そうですね、何かあるとポスターを張ったりというのもありますし、そういう、何というんでしょう、大学内の講堂とかで、そういうようなイベントをもっと開催するというのもいいのかなとか思いました。

市長：なるほど、ありがとうございます。

どなたか、どうぞ、御自由な意見で。

田中さん、どうぞ。

田中さん：田中です。私は、ちょっとそれを大学生が疎まれているんじゃないかと思う、ちょっと根拠がありまして。

根拠というか、自分自身が体験したことではなくて、大学からの連絡とかによってなんですけれども、私は、結構大学からいろんなイベントがあったりとか、何か注意事項についての連絡を全て携帯に入るようにしていまして、その連絡の中で、結構、ここ最近、頻繁に駅前コンビニに無断駐輪するなという連絡とともに、歩行についてのクレームが寄せられているんだというメールが何通も何通も来ていまして、うるさかったりとか、あとは、歩行者が通れないとか、あとは車が通れないということをよく連絡でいただいているので、近隣住民の方には迷惑をかけているのかなという実感がありました。

あと、逆にまたこちらも、端っこに寄って歩いているのに、歩道と車道が分かれていないために、クラクションを鳴らされて、私自身がびっくりしたことが何度かあって、そういうこともいろいろと地域の方々と知り合えば、もっと改善されるのかなというふうに、今、聞いていて思いました。

市長：そうですね。

田中さん：はい。

市長：　確かに明大の坂を上っていくところ、あそこにかなり広く、こう、歩いちゃっているケースとか、ありますよね。確かにそういうマナーに関する話というのはあると思いますし、でも、非常に狭いんですよね。という物理的な部分もあるから大変だというのは分かるんですけどね。ぜひ、それも本当に、田中さん

がおっしゃっていただいたように、コミュニケーションですよね。お互いにやっぱり、みんなで、狭いところでどうやってうまくルールをつくっていくかというふうなのを、みんなで考えて、こういう取り組みをやっていますというのが、みんな地元の人たちも分かってくれれば、何というか、直接的な、攻撃的な苦情にならないと思いますし、そういうことは大事だなと思いますね。
　鈴木さん、どうですかね。

鈴木さん：ちょっとそれてしまうんですけども、私、大学で、たま区民音楽祭とかってありました、去年。ああいうのの運営や、生田緑地の案内というものをやったことがありまして、意外と区民の方、いわゆる、たま区民音楽祭とかに行くと、やはり意見いただくことがあるので、やっぱりそういう意見を聞いたら、こういうことをやっていたんだとか、区民の方に聞くと、やっぱり僕も大学に少ししかいないので、こんなことを川崎市でやっていたんだとか、多摩区でやっていたんだという意見が結構分かったので、もう少しそういう、たま区民音楽祭などに参加できれば、関わりを持てるのではないかということを思いました。

市長：何か専修大学のあるゼミの方が、川崎北部市場という市場があるのを知っていますかね、近くに市場があるんです。市場のところで「市場めし」という、専修大学の方、ゼミ生の皆さんが、市場の材料を使ってどんなおもしろい食べ物ができるかということをプロデュースして、実際に市場のレストランで出しているというものがあって、なかなかの人気で、専修大学がプロデュースした市場めしというふうに注文されるのが非常に多いんですね。そういったものによって地域の何というかな、つながりというふうなのを市民の皆さんも感じる。
　黒沼さん、明治でしたっけ。

黒沼さん：はい。

市長：明治だと、例えば農学部と川崎、非常によく、いいつき合いをさせていただいていて、例えば、「のらぼう菜」を一緒に共同研究をやったり、そういった都市農業についてもいろんなコラボレーションをしているんですよね。そういうようなものを実際に、今、売ってくれていますし、明大ブランドで売っているんですよね。そういうふうなことで享受できたり、あるいは、そんなメニューを使って明大プロデュースの食なんかを提供してもらうと、新しい地域活性化になるかもしれませんね。
　何か、そういうようなものを３大学でもそれぞれ置いた、それぞれ単独の大学でももちろんいいし、３大学連携プロジェクトというふうなのもあるとおもしろいかもしれませんね。
　よろしいでしょうか。

司会：それでは、続きまして、次のテーマに進めさせていただきます。
　次は、こちらの８番、９番ですけれども、子供・子育てということでお願いしたいと思います。
　それでは、御提案いただいております。大迫さんからよろしくお願いします。

大迫さん：改めまして、専修大学３年の大迫と申します。よろしくお願いします。
　私は、川崎市でも将来的に訪れるのではないかとされている少子化についての対策を提案したいなと思いました。具体的な提案としては、育児休暇のことを提案したいなと思いました。
　これを提案した理由なんですけど、私は、子供の余暇支援活動をするサークルに入っていまして、多摩区の中でも結構、生田緑地でしたり、有名な漫画家さんのミュージアムでしたり、あとは、もうちょっと遠いですけど、遊園地がありましたりとか、すごい子供にいい環境なのではないかなというふうに、そのサーク

ルを通して思いまして、子供が減ってきているのは悲しいことなので、増えるようなことを提案できたらいいなと思って、このことを提案させていただきました。
　具体的な中身としましては、１年とか２年とか長い単位ではなくて、１週間の中で働く日と働かない日を分けて行うなど、なるべく仕事から離れないで、なおかつ子育てもできるような制度をつくっていけばいいのではないかなと思って提案させていただきました。
　以上です。

司会：ありがとうございます。
　続きまして、近藤さん、お願いします。

近藤さん：日本女子大学教育学科の近藤奈穂と申します。
　私は、公園や小さな遊び場の提供ということで、日本女子大学の周辺は、結構、坂道の中で住宅地が密集していると思うんですけれども、その反面、坂道だったり、住宅地の、ちょっと狭いというのもあるんですけれども、公園や小さな遊び場というのが少ないと感じていまして、先ほど若色さんがおっしゃった、ベンチがないというのにもつながると思うんですけれども、ちょっと一息つく場所であったりとか、何かちょっとしたときに集えるような場所というのがあれば、３大学の学生も含めて住民の方々との交流の場になるのかなというのを少し感じていまして、せっかく自然が多い地区なので、何かそこが少しもったいないなというふうに感じていまして、ちょっと提案という形でさせていただきました。

司会：ありがとうございます。それでは、子供・子育てというテーマで意見交換いただきたいと思います。よろしくお願いします。

市長：近藤さんの今の御提案は、公園が、どういう具体的な提案ですか。ごめんなさい、ちょっと聞き逃がしたかもしれませんけども。

近藤さん：生田緑地などはあるんですけれども、それも上のほうに坂があったりしますので、もっと身近なところ、駅の周辺だったりというところに、公園まで行かなくても、ちょっとした広場にベンチがあるなどのスペースが、広場というものがあるといいなということです。

市長：なるほど。分かりました。ありがとうございます。
　まず、じゃあ、大迫さんのほうから話をしますと、余暇支援活動を大学のサークルでやっていただいているという、ちょっと御紹介していただいてもいいですか、どんなことをやっておられるのか。

大迫さん：はい。大迫です。
　専修大学のサークルでやっているんですが、多摩区だけじゃなくて麻生とか高津とかの四つの班に分かれまして、毎週土曜日に、各班の子供たちを集めまして遊ぶという活動をやっていまして、具体的には、公園で学生が考えたゲームをして遊んで、おやつを食べて、歌とかダンスをして帰るですとか、読売ランドに行って遊ぶですとか、生田緑地でわいわい遊ぶですとか、そういうことをやっています。

市長：それは、週末ですか。

大迫さん：毎週土曜日に。

市長：毎週土曜日に。

大迫さん：はい。やっています。

市長：ああ、すごいな。そういう活動をしてくれているんですね。どういうところが対象になるんですかね。どうやって呼びかけているんですか。

大迫さん：主に障害者の方を。

市長：ああ、なるほど。

大迫さん：知的障害とか、自閉症の子供たち、小学生から高校３年生ぐらいまでの方を対象にしていまして、そういう親御さんのつながりで入ってくださる方が主になっています。

市長：ああ、そうですか。いや、すばらしい活動をしていただいて、本当にありがとうございます。
　御提案のところは、育児休暇をもっと取りやすくしたらどうかというふうな御提案でよろしかったですよね。そうですね、育児休暇を取っている人の割合というのは、徐々には増えているんです。女性の場合が８割をちょっと超えて取っている。でも男性は、過去最高でも、まだ３％という国全体ではいっていないということですから、いかに男性のほうが育休を取っていないかというのは、すごい、こう、アンバランスだということだと思いますし、実は、そのことについても、川崎市としても、まだ実は男性３％しか、市の職員も取っていないんですよ。女性は１００％取っているんですけども、男性はわずか３％という、この格差は何だというぐらいそうですし、なるべく、やっぱりそれぞれのライフスタイルに、ステージに合わせて、しっかりと休暇も取って、育児にも参加してということを環境をつくり上げていくことというのは、市だけじゃなくて、本当に区、国全体として大事なことだと思うんですよね。安心して子供を産み育てることができる環境。
　それについて、実は僕たちもすごく危機感を持っていて、どんな、どういうふうにしたら男性が取るようになるかなとかというふうなのをいろんな議論して、この前も、九都県市という、東京、神奈川、千葉、埼玉県、そして、そこにある五つの政令指定都市、全部で９あるんですけど、九都県市という会議体があります。そこの知事や市長が集まって議論するんですけども、働き方改革というか、どうやったらそういう働き方を変えることができますかねと。育児休暇もそうだし、働きやすい環境になるかというふうなことについて議論して、実は川崎市から提案したんです。というのも、あんまり川崎市、いい成績ではなかったからなんです。ですから、ほかの都市で学ぶべきものというふうなのはどんなのがあるんだろうなと、制度上。というふうなことを今、研究して、やり始めたところなんです。
　そういったことを、やはり民間が、市の役所というと、ごくごく一部なので、それを本当に大企業、一番厳しいところというのは中小企業なんですよね。中小企業の皆さんが育休をしっかり取ってもらえるような環境にしていくということは非常に難しいことで、それをどうやって社会全体で支えていくかということが、僕もテーマだと思っています。
　川崎市内の９９％、事業所数でいうと９９％は中小企業です。それで、７５％の従業員の人たちというのは中小企業で働いています。ここの改善をしないと、一部の役所だとか大企業のところだけが子育てしやすい環境を整えたところで、圧倒的な７５％の人たちというのは対象にならないというのであれば、世の中は変わらないですよ。

そういったことを、やはり自治体としてもそうだし、これは国全体というふうなことでもやっていかなくちゃいけないと思うので、川崎市で感じていることというのを、やっぱり国にも言っていく、企業にも言っていくということにこれからも取り組んでいきたいなというふうに思っています。

川崎市でも、単時間で働くというふうなのをやっていまして、これはやっぱり育児期間中で、例えば１日５時間働く人、１日４時間働く人、あるいは週に３日働くパターンとかと幾つものメニューがあります。そうやってちょっと切り分けてやるというふうな制度はありますけども、それをうまく活用して、広めていきたいなというふうに思っています。

それから、近藤さんから、公園の話をいただきましてありがとうございました。実はこれ、すごいテーマで、今、僕、これ一生懸命研究しているところなんですけれど。公園って誰にとってうれしい公園かなというふうなことをよく考えるんですね。

近藤さん、ちなみに公園へ行きますか。

近藤さん：すみません。多摩区に住んではいないので、やはり大学に通っているので、この辺の公園は、緑地には行ったことはあるんですけれども、余り大学周辺にはないので行ったことはないんですけれども、地元では、やはり小さいころは公園でよく遊びましたし、放課後の場だったりとか、公園に行けば大人もいるし、公園で清掃活動を一緒やるなどという交流も結構あったので、何かそうした、学校だけではない、地域との、子供も大人も年齢関係なくという場というのは大切なんじゃないかなと思っています。

市長：そうですね。最近、公園に行った人。（挙手）

半数いっていないかな、という感じだね。田中さんがさっき言ったのは、近くの公園でしょうか。

田中さん：生田緑地です。

市長：あっ、生田緑地ね。生田緑地みたいな大きい公園……今、手を挙げた人、もう一回手を挙げてもらっていいですか。公園へ行ったよと、最近。そのうち、生田緑地とか大きな公園に行った人。（挙手）

小っちゃい、こう、何というか、街区公園という、小っちゃい公園に行った人。（挙手）

傍聴者の方も手を挙げていただいてありがとうございます。

今、参加者の中だと、小さい公園に行ったのはお一人、大迫さんだけ。それは、先ほどの余暇支援活動で行っていただいたという形ですね。

このように、実は、去年、一昨年にもうなりますかね。小学生から、僕、市長への手紙というふうなのを何通かもらっているんですね。ボール遊びができない。どこへ行ったらボール遊びができるんですかというふうな話が。もうちょっと広いところ、こっちに行っていただけますかといったら、それは結構遠いんですよ。結構遠いところまで行かなくちゃいけないというのは、子供にとっては非常に辛い、身近なところでボール遊びができないというのは辛いですね。

実は、ボール遊びは禁止はされていない。ボール遊びは禁止されていないんだけど、危険な行為はしないでというふうな話で、どこまで危険なのかというのは、実はすごく曖昧で、ルールというのは余りないんですよね。だけど、ボール遊びはしちゃいけませんとかって書いてあるという公園というのは結構あるんです。

これは誰にとって……、小さい子供がいるときは、ボール遊びなんかされると、危なくて赤ちゃん怖いという方もいらっしゃるし、せっかくのんびりお年寄りがゆっくり座っているところに、ばんばんサッカーボールが飛んでくるというふうなところで怖いという部分もあるとか、その逆だったりもするんです。

これは本当に誰にとっていい公園なのかというと、実はみんなやっちゃだめ、やっちゃだめ、これはやめてくださいというと、だめだめ公園になっちゃって、公園としての魅力ってなくなっちゃっているんじゃな

いかというのが、それは危機感を持っているんですね。

実は、今年から各区に１カ所ずつ（※注３）、ちょっとモデルケースで、そういった地域の皆さんの中でルールづくりをしましょうということをお願いしています。これはそれぞれの区も入って、市の担当者も入って、地域住民の皆さんで一定のルールづくりをやっていきましょう。この公園をうまく活用するためには、市のほうで、ばちって、何かこれでやってくださいという話じゃなくて、その地域の実情に応じた使い方ということをみんなの合意の中でルール指定していかないと、みんなの公園にならないよねって。そういうふうなのをまずやっていきましょうということで、各区で、今、始めた、１カ所ずつ（※注３）ですけど、やり始めました。（※注３）正しくは市内３カ所です。

こういったことがほかのところにもどんどんどんどん広がっていけばいいなというふうに思っています。都市部の中でこの問題すごく大きくて、川崎だけじゃなくて首都圏のところを初め、大都市部はみんなこの問題を抱えていて、例えば、ボール遊びの声がうるさいとか、さっきの話じゃないですけど。じゃあ、子供たちはどこで遊べばいいのということにもなるので。だから、住民の人たち、地域の人たちとどういうものをつくったらいいのかなということを、ルールづくりを自分たちでつくっていこうという取り組みをしています。

それと、もう一つは、小さな公園というのは、実は物すごい数あるんですね。あれは何か、例えばマンションを建設するときに、一定の緑地公園を、緑地帯、公園をつくってくださいというふうなルールがあるので、ちょこっと、ポケットパークみたいな本当に小っちゃな公園、これ、なかなか使い勝手よくないよねというような公園も、実はあることは、たくさんあるんです。そういうのが本当にいいんだろうかという議論もあるんですね。それよりも、もう少し何か、こう、こういう小っちゃなのをぽこぽこつくっても、何となくアリバイ的公園になっているんじゃないかという意見もあるんです。日影の一番暗いところに公園を持っていったりしたりということも、市内の中では結構散見されるので、こういったことにも取り組まなくちゃいけないなという課題認識は持っているんです。

少し、公園はこれから大きなテーマになるというふうに思っていますので、ぜひ、公園に、みんなだったら、多分、学生の皆さんが一番公園を利用していないかもしれません。意外と……、でも、僕の世代も使っていないな、子供と遊ぶときぐらいで、日中、平日は使っていないですし、そうですね、もう子供、子育て世代なので、私の妻と子供は使っているんですけど、公園。でも、僕、使っているかといったら、やっぱり使っていないなという。

だから、みんなが、どうやったら楽しい、みんなが楽しい公園になるかということを、こういう場で、いろんな世代の人たち、その地域に住んでいる人たちが、利用する人たちが、どういうルール、どういう公園をつくろうかというのを、やっぱり議論していかなくちゃいけないなと思います。

シニア世代からしてみると、少し健康器具を置いてほしいというのを実はすごく要望が多いんです。今までみたいな、ブランコとかじゃなくて、公園三種の神器みたいなのがあるんですよね。ブランコだとか、すべり台とか。そういうのじゃなくて、健康器具を入れてくれると健康増進につながるしと。でも、そういう利害関係をみんなで、こう、議論して一定のルールをつくっていこうと、こういうことを今までもやってきてはいるんですけども、もっと進めなくちゃいけないなというふうに思っています。ぜひ、そういう議論にも、皆さんに加わっていただきたいと思います。

以上です。

司会：ありがとうございます。

それでは、最後になりますけれども、五つ目のテーマとしまして、選挙参加ということで進めたいと思います。御意見、御提案いただきました河崎さん、御発言をお願いいたします。

河崎さん：改めまして、専修大学経済学部の河崎です。
　私は、７月の参議院選挙でインターンを麻生区でさせていただいたんですけど、このときにいろいろ貴重な体験をさせていただいたので、そのことについてもう少し、国レベルでやっていかないといけないのかもしれないんですけど、意見させていただきました。
　インターンをさせていただいて、期日前投票から投票の日まで５日間やったんですが、新百合ヶ丘駅で啓発活動として、あのときは暑かったので、ウェットティッシュを配るというのを僕も担当させていただいたんですけど、僕以外の人は、ボランティアの方はみんなお年寄りで、５０、６０歳から７０歳とかの方と一緒に、僕も一緒に混ざってやったんですが、受け取ってくれないという方が非常に多くて、年齢層としては、やっぱり２０代から４０代ぐらいまでの若い層が受け取ってくれないで、受け取ってくれるのは、ボランティアの方と同じ年齢の方が多くて、これは非常に残念だなと思って。ティッシュはなくなったんですけど、ティッシュを配れた内容が良くないなというのを非常に強く思いました。
　なので、僕もそうなんですけど、インターンシップをやって、すごい選挙の大事さというのも分かったんですけど、インターンシップだけだと、やっぱり学生は多いんですよ。それだけじゃ、やっぱり限界があると思ったので、今回、意見させていただきました。
　以上です。

司会：ありがとうございます。
　それでは、選挙参加につきまして、意見交換をお願いいたします。

市長：この前の選挙は何だっけ、参議院ですよね。参議院選挙へ行った人。（挙手）
　投票率８０％だな。１０人中８人は行っている。非常に、こういう人たちばかりだと、投票率は非常に上がっているんだと思いますが、残念ながら、今、河崎さんが言っていただいたとおり、２０代から４０代の投票率って非常に低いです。ティッシュを受け取らなかった人と、ほぼイコールに投票率が低いという傾向がずっとありますね。
　理由はさまざまだと思いますけれども、現実にはずっとこの２０代から４０代の層というのが低くて、うれしかったのは、川崎市、１８歳の投票率、初めてなわけですよね。１８歳の投票率、政令指定都市の中でナンバーワンでした。何%だったかな、すごい高かったんですけども、残念ながら、１８歳は政令市の中では全国で１位、だけど１９歳になるとまた低くて減って、二十歳になるとまた低くて減ってという形で、何か瞬間風速的で、ちょっと残念だったんですけども、みんなが１８歳、１８歳、選挙権、選挙権と言ったので、１８歳の人たちは非常に意識が高かったんだと思いますね。だけど、いろんな理由があったとしても、二十歳からそれ以降の人たちというのが低かったというのは、残念なことだと思います。
　今、さっきの美化の話に通ずる、あるいは自転車マナーにも通ずる話なんですけども、実は川崎の教育委員会のところで、小学校、中学校、高校生といって、それぞれに合わせた、高校生になってからいきなり選挙について話すのではなくて、シチズンシップ教育ということで、小学校、中学校、高校に合わせた形で、啓発活動というか、選挙とは何だということを今、シチズンシップ教育という形で教育委員会というか、各学校でやっています。
　こういうことを積み重ねていくと、だんだんだんだん、今１８歳でも意識が高かったように、今後生まれてくる投票率というのは上がっていくんだと希望しています、願っています。一方で、僕、記者会見でも聞かれたんですけどね。投票率を上げる、若者が、投票率を上げる策は何だと思いますかと聞かれたので、まず、今の大人たちが投票に行く、この姿を見せることが一番大事じゃないんですかというふうに言ったんですね。若者に投票しろと言っている人たちが、投票に行っていないんですもの。
　さっきのマナーの話と一緒ですよね。マナーを守らせたいと。将来に向かって守らせたいと思う人たちが

マナーを守っていないのであれば、これは本末転倒な話と同じように、投票率の話も全くそのとおりだと思うんですよ。今の世代の人たちがしっかり行かなければ、何を子供たちに、あるいは将来の世代の人たちに伝えることができるのかと思うんですね。

ですから、皆さんも、ぜひ、投票に、必ず投票に行こうと、自分の意思を示そうということをですね。なかなか学生同士でも、選挙の話とかって、何となくしづらくないですか。どう、飯塚さん。

飯塚さん：私は、今は川崎市に住んでいるんですけれども、実家はほかにあって、選挙の場合も実家に一度戻って投票に行ったんですけれども、やはり、私のように大学からほかの県に出ている友達は、意識の高い友達ですと、大体戻ってきて選挙に行くという形になっていて、みんな、大学で選挙に対する意識はあっても、どうしても投票に行けない人もいて、そういうのがすごいもったいないなと感じていて。選挙が今から１８歳からできるんですけれども、大学で地元を離れると、どうしても住所がこちらにないと出ばなをくじかれる形になってしまっていて。

市長：なるほど。

飯塚さん：選挙権を持って、それに行きたいのに物理的に行けなかったりであるとか、投票している姿が見られないというのも、あり得ることなので、もう少しそういうところも対策していただけたらいいなと思いました。

市長：なるほど。ありがとうございました。

こういう選挙のときに、選挙の話を友達としたよという人っていますか。（挙手）

あっ、結構しているんだ。えっ、河崎さん、しなかったの。

河崎さん：僕は、話すことはできるんですけど、それを理解してくれる友達が周りにいないので。例えば、何とか党だ、何だよという話は、僕はインターンをやって少し知識は得たんですけど、その知識を得ている友達がほかにいないので、話がかみ合わないです。

市長：かみ合わない。なるほどね。ゆえに、その、何党がどうのという話じゃなくて、なぜその選挙で投票する行為が大事か。自分の投票が、要するに民主主義の中でどういう役割を果たしているのかということをしっかり、やっぱり教育されていなかったりする、今までされていなかった部分って多いと思うんですよね。ですから、そこの部分は、学校教育の中でもしっかりやっていかなくちゃいけないなというふうに思いますね。そうじゃないと、いきなり、はい、１８歳になりました、はい、投票権があるからどうぞと言われても、何のことやらというふうな話になると思うんですよね。

僕、実は毎年、成人式のときに、これまではね、二十歳で投票権だったので、二十歳になったら選挙管理委員長さんが御挨拶して、皆さん、今日、今年からは投票できますから、大人としての自覚をというふうに、いわゆる挨拶されるんだけれども、しかし、その前の教育がしっかりできているかどうかというふうなのは甚だ疑問で、このあたりというのは、しっかり、先ほど言ったように、小・中・高と、その年齢に合わせた教育を行っていくことが、ある意味、時間がかかったとしても、何というかな、大切なことだと思うんですよね。

急に投票が物すごく意識が高まってというのは、恐らくそんなに、ちょっと考えづらいのかなというふうに思うんです。ですから、地道に、しっかりとその制度というか、選挙の大切さとかということをしっかりと、こう、丁寧に教えていくことが、将来的にとっても、日本にとって大事なことなんじゃないかなという

ふうに思います。
　でも、ぜひ、せっかく河崎さん、いい経験したので、友達にもっとぐっと、もう一押し、いろんな話をしてみるというのは、その経験を話すだけでも違うんじゃないかなというふうに思います。ぜひ期待したいと思います。
　このテーマで何か。近藤さん、いかがですか。

近藤さん：先ほどちょっと、ちらっと出たんですけれども、投票に行く際に、大学生になると、やはり地元を離れているので投票がしにくいと。私も実家が、ちょっと、こちらじゃないので、ちょっと予定が合わなくて、どうしても今回、投票に行けなかったんですけれども、そこのシステムを変えるというのも、ちょっと重要かなと。若い世代に投票してもらうというのだと、やはり地元を離れるとかって、本当に多いと思うので、そこのシステムをやっぱり何かあったらいいかなというのを思います。

市長：そうですね。ありがとうございます。
　これは本当に、国全体で整備しないと、これはできないので、でも、誰もが、どこからでも投票できるというのは理想の形だと思いますけどね。
　よろしいですか、河崎さん。

河崎さん：はい。

市長：はい。ありがとうございます。

司会：ありがとうございます。それでは、本日は、１０名の方からいろいろな御意見をいただきまして、五つのテーマに分けて、今回、ディスカッション、意見交換をさせていただきました。全体を通しまして、最後に、福田市長のほうから、全体を通してのコメントをいただければと思います。お願いします。

市長：改めまして、皆さん本当に御参加いただいてありがとうございました。
　今日の中で一つ、一言でまとめるとすれば、やっぱり、何らかの縁で、この大学、皆さんそれぞれの大学に入って、川崎で学んでいるということですから、ぜひ、そのことを生かしてというとあれですけども、地域の皆さんに、地域の中に入り込んでいく、そして、コミュニケーションをとっていただく。それで地域の活動に参加してもらうと。まず、知るところから始まりますよね。知ってみて、参加してみてというふうなことに、段階になっていくと思うので、ぜひそれを、きっかけづくりを区も一緒になってやっていきたいと思いますし、それぞれの大学と、そして、今日お集まりの大学生のそれぞれの個人が、やっぱりつながっていくということが大事だと思いますので、いろんな誤解だとかが生まれているんじゃないかというふうに、ちょっと僕も危機感を持ったところなんで、より地域の人たちと、繰り返しになりますが、いろんな交流をしていくということが、３大学連携の本当の何か趣旨なんじゃないかというふうに思いますので、これをもっと進めていきたいなというふうに思っています。
　それぞれに、本当に貴重な御意見をいただいたと思いますし、佐々木さん提案の自転車のマナー、どこにターゲットをしていくべきなのかということも議論の中から出てきたこともありますし、非常に実り多い議論だったというふうに思います。皆さんの参加に心から感謝をしたいと思います。ありがとうございました。

司会：市長、ありがとうございました。
　以上をもちまして、第２６回区民車座集会を終了させていただきます。